MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

ミステリ読書案内

２０２３．３．２８　発行元
第 461 号　伊藤　剛
https://mystery-dokuan.com

MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

最近のライト文芸ミステリ

最近になって出版された本の中から４冊を紹介する。今回は初めて読む作家を選んでみた。力量がわからないので手探りだが、少しでもミステリとしての形が整っていそうなものを店頭で購入した。

久しぶりのライト文芸ミステリ

前回「ライト文芸ミステリ」を取り上げたのは第３９９号だから、ほぼ半年ぐらいの間隔が開いたことになる。最近は目を引く本が出ていないようなのだ。数だけは出ているが、売れ行きは今ひとつなのではないだろうかと思ってしまう。

久しぶりに新刊書店でじっくりと時間を掛けて本選びをした。山口幸三郎以外は初めて読む作家。私の選ぶ観点は「ミステリ性」の部分なので、キャラクターは重視しないし、お化け、あやかし、幽霊…に気を引かれることもない。恋愛もの一辺倒も好みではない。

本の後の「あらすじ」を見るのだが、判断は難しい。決め手は「真面目そうに見えるか」「必死になって書いているか」ということ。合格点はあげられなくても、作品に取り組む姿勢に見るべきものがあれば良しとしようの気持ち。

今回取り上げた四作。「まあまあ」のレベル。「続けて読みたいか」と聞かれると即答できかねる。他にも読むべき本はたくさんある。

山口幸三郎『親愛なる怪盗たちに告ぐ』

昨年８月にメディアワークス文庫から出た本。『探偵・日暮旅人』シリーズを読んでから随分時間が経った。最近の作品はどうかと思って手に取った。本書は貧乏女子学生の赤石満が祖父の形見のブローチを取り戻したいと考えるところから始まる。同じ大学の中で「白峰界人」を名乗る怪盗団が存在するという噂を聞き接触を試みる、という流れ。前にもそう思ったが、ライト系、キャラクター系ミステリであるにも関わらず大物政治家、反社組織、暴力団…が安易に登場してくるところが気にかかる。この作者の特徴と言えばその通りなのだが、本作品の結末、後味はそう悪くはないので残念に感じる。

中村一『探偵先輩と僕の不完全な事件簿』

２０１９年メディアワークス文庫。ペンネームを見てもそう思うが、作者は少し年上の雰囲気で真面目。一生懸命書いている様子が窺える。「学園探偵もの」である。

主人公は横浜の大学に入学した宇賀神楽人。大学自治会に入り、サークル存続届の調査を命じられる。行った先が「ミステリ研究会」。部室にいたのは霞ヶ浦秋乃と名乗る探偵。楽人は勝手に助手の役を割り当てられ、調査に付き合う羽目になってしまう。悲鳴を聞いて駆け付けたのは「クラウドクローゼット」というサークルの部室。マネキンの指が切られ、落ちた指に指輪がついていた。その指輪は昨日盗まれたもので、部室はきちんと鍵が掛けられていたという。密室に現れた指輪の謎が第一話。

栗栖ひよ子『仕立屋王子の謎解きデザイン帖』

昨年１１月にマイナビ出版のファン文庫から出た本。デビューしたばかりで物語作りに真正面から取り組んでいる姿勢が感じ取れる。ミステリ味は弱いけれど、読みやすいストーリー。

主人公はアパレルブランドに就職したものの、販売員でしかない布川糸。本当はデザイナーになりたいのだ。幼い頃の記憶を頼りに東京・表参道にある仕立屋「filature」を訪ねる。店にいたのは若い男性で針ヶ谷紡という人物。祖父母が知り合いだという。糸は祖母が最後に残したデザイン画に隠された謎を紡と共に解き明かしていく。お仕事ミステリである。

紺野天龍『幽世の薬剤師』

昨年の４月に新潮文庫 nex から出た本。現在は３冊目まで出ている。通常なら「あやかしの世界」関連の本には手を出さないのだが裏表紙にある「漢方×異世界×医療ミステリー」の文に引きずられてしまった。ミステリというよりは物語性を重視した作りと言えるだろう。途中まではやや盛り上がりに欠けるが、後半はスピード感が出てくる。

現在の世界では薬剤師としてはたらいていた空洞淵霧瑚うろぶちきりこは不思議な少女と出会ってこの世とあの世の狭間にある「幽世かくりょ」という異世界に飛び込んでしまう。そこでは「吸血鬼症候群」とも思われるパンデミックが進行していた。空洞淵は幽世の巫女・綺翠と協力して多くの苦しんでいる人を助けようと奔走する。お祓いと漢方薬だけではなかなか根本の解決までには行き着かない…。やがて…。異世界の設定が明治時代ぐらいなのか、作者の年齢を感じさせるところもある。今の若者が「五右衛門風呂」の実体験を持っているとは思わないし…。続編を読んでみようかの気分にはなった。